



教授の背中

大谷信介

社会学部
教授

皆さんは「社会調査士」という資格をご存知だろうか。社会調査士とは、社会調査の知識や技術を用いて、世論や市場動向、社会現象等を捉えることの出来る能力を有する調査の専門家のことだ。この「社会調査士」という全国資格が、「東京」の「国立大学」からではなく「関西」という「関西」の「私立大学」が発端（1995年全国初の教授会認定による「関西社会調査士」が発足となって創られたという事実について、多くの関学生は知らないだろう）。

今回紹介する大谷信介教授は、社会調査士制度を、社会学会・教育社会学会・行動計量学会の三学会を構成団体とする全国制度にしていくにあたって中心的に動いた人物の一人である。その社会調査士資格認定機構事務局は関学の全学共用棟2階にあり、大谷教授は教授職と共に事務局次長も兼任している。

ここで社会調査士の資格の取得方法を説明したい。資格というと試験を受けて合格すると取得できるのが一般的だが、この社会調査士の取得方法は違う。社会調査士の資格を取得するには、認定機構が定めた「標準カリキュラム」に準拠した科目を設置している資格

制度参加校（大学）で調査に関する五科目と実習一科目を取得することで、学部卒業時に資格が交付される。2004年に第一回資格取得者が167名誕生し、2005年に449名、2006年に999名誕生した。このことから、社会調査士への関心が高まっていくことが分かる。社会調査士科目を設置している大学も2004年に69校だったものが2006年には126校と年々増えてきている。

社会調査士制度が誕生するにあたって、資格の必要性を広く全国に知らしめることになったのは、大谷教授のゼミ生53名（4回生22名、3回生30名、院生1名）が出版した『これだけの市民意識調査』ミネルヴァ書房2002年であった。この本は、4回生が、大阪府下44の市役所を何度も訪問し、「総合計画策定のための市民意識調査」の実態に関する聞き取り調査を実施し、3回生が、4回生が収集した44の調査票を分析し、院生の協賛で、調査研究全般の調整役を務めることになって作成された。学部生が書いた論文が本として出版されることはとても珍しい。大谷教授は、研究仲間から「無謀な試みだ」と言われたこともあったが、ゼミ生たちに何度も何度も原稿を書き直させ、ゼミ生と教授の忍耐と努力の結晶として出版にこぎつけたのである。この本は、市役所で行われている社会調査がいかにずさんなものであったかという実態を世間に明らかにし、正しく社会調査を実施し分析

できる人材育成の必要性を提起した点で、社会調査士制度に貢献したといえる。

大谷教授は言う「この本は、東大や京大ではなく、関学だから出来たのだ。私立大学は学生数が多くマイナスイメージが強いから、この本は53人のゼミ生が調査にかかわったからこそできたのであり、関学は関学のいいところをのばせばとても大きなことが出来るのだ」。

これまでの話の流れから大谷教授は社会調査の専門家だと思われるが、本人は都市社会学の専門家だと考えている。確かに社会調査に関して多くの知識はあるが、それは都市を研究するにあたっての一種の手段であるという。今は、都市についての本を早く出したいと執筆活動を続けているそうだ。

最後に大谷教授から学生にメッセージを頂いた。「視野を広げる」ことよりも、「視点を変える」ことがとても重要だ。この言葉は、教授が院生時代にタクシー運転手のアルバイトを四年間していた時に痛感した社会学的教訓だ。客でいたときは「タクシーの運転手はメーターがあがるようにして停車している」と思っていた事実は、運転手側から見ると、「お客が降りやすいように停車している」ことだったのだ。客側の視点をいくら広げたところで、この事実は気づかないのだ。〈視点を変えて〉物事をみる事が出来る能力こそ社会学的センスといえるのである。

おおたに・しんすけ

1955年 横浜市生まれ
1984年 筑波大学大学院博士課程単位修得退学